

ふくしま 再生 短信

地産地消エネルギーの原点

山津見神社の水力発電



水圧管路

2014年11月2日、劇的出会いの日、真野川の溪流に今なおその姿をとどめる山津見神社の水力発電所を訪ねた。無論現在は稼働していない。真野

川上流から導水路を通ってきた水流は落差を設けた「水圧管路」を一気に下降し、「水力タービンを回して発電機に動力を伝え」た後、放水口から真野川に流れ出る。これらの基本設備をほぼ無傷の状態で見学することができた。80年以上も前に設置された設備と聞いてはいた。だからこそある「謎」が記者を捉えて離さなかつ

た。それは何故あの大戦中にタービンや発電機が「金属の供出」を免れることができたのかという疑問である。戦争末期には金属不足で陶器製の手榴弾も作られていたのだから。答えは『飯館村史・第1巻 通史』にあった。

1929年（昭和4年）、山津見神社宮司の久米松太郎は真野川から導水路を分流し、神社前まで誘導して落差



今なお堅牢な放水口の石垣

を確保し（目測で約9m）3キロワットの発電機を回転させて水力発電方式による自家発電を開始し、社務所に配線し点灯に成功している。おそらくこの地域にお

ける最初の電灯は同年（1929年）の11月の山津見神社の大祭に間に合った、と村史は記述している。水力発電による点灯は夜に行われ、日中は蓄電池に充電した電気を利用してラジオを聞くことができた。東北地方のラジオ放送は1928年に始まっていた。大戦中の資材の不足の苦難の時代を経て東北電力による配電が行われる1955年3月1日まで山津見神社の自家発電は行われたのである。（前掲書、712-713頁）

「謎」は解けた。山津見の発電は大戦をくぐり抜けて戦後復興期まで26年間の文字通り風雪の日々の営

みを止めなかった。「供出」以上のかけがえのない価値を生み出し続けていた。今年も11月の大祭の日には地産地消エネルギーの「種蒔く人」久米松太郎宮司を偲びたいとおもう。（文責&撮影・若林一平）



タービンと発電機

最初の挑戦はバイオエネルギー。自前の点灯の最初の挑戦者は菅野庄太である。1927年、庄太は自宅の前庭にメタンガス発生装置を設営し

た。傾斜面を利用して板材を使った大きな水槽を作り、これに青草や木の葉、残菜などを入れてメタンガスを発生させてそれをガス管に誘導し

て点灯しようとする試みである。しかし結局この試みは実を結ばなかった（前掲書、712頁）。村民の開拓者精神には舌を巻くばかりである。